

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	姜 知瑛 (かん ちえい)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学部 人間情報学科 学部 3 年
発表年月 または事業開催年月	2026 年 3 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	社会言語科学会第 50 回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	姜知瑛 門田 圭祐 関根和生
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	日本語版 BAG (Brief Assessment of Gesture) 質問紙の開発と信頼性・妥当性の検討
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>背景</p> <p>発話に付随するジェスチャーは、聞き手の理解を助けるだけでなく、話者自身の情報処理を促進する効果を持つ。ジェスチャーの使用や理解には大きな個人差があることが知られているが、日本において個人のジェスチャーに対する価値観や態度を測定する標準化された尺度は存在しなかった。本研究は、Nagels ら (2015) が開発したジェスチャー簡易評価尺度 (BAG) の日本語版を作成し、その心理測定的特性を検証することを目的とした。</p> <p>結果</p> <p>探索的因子分析の結果、日本語版 BAG は以下の 3 因子から構成されることが明らかになった。</p> <p>否定的態度 (第 1 因子) : 他者のジェスチャーに対し、気が逸れる、落ち着かないといった否定的な反応を示す傾向。</p> <p>機能的活用 (第 2 因子) : 騒がしい場所や言葉が通じない場面で、意図的にジェスチャーを用いて情報を補おうとする傾向。</p> <p>親和性 (第 3 因子) : 日常的にジェスチャーをよく使い、自身の表現手段として親しんでいる傾向。</p> <p>内的整合性の検討において、第 1 因子は十分な信頼性を示し、第 2・第 3 因子も中程度の信頼性が確認された。</p> <p>また、実際の発話場面におけるジェスチャー数との相関分析の結果、「機能的活用 ($r = .400$)」および「親和性 ($r = .313$)」の因子得点は、実際のジェスチャー産出数と有意な正の相関を示した。一方、否定的態度は産出数との相関が確認されず、他者の動作への受容態度と自身の産出行動が独立した側面である可能性が示唆された。</p>	

※無断転載禁止